

国際協力論 I

科目ナンバリング INR-201
選択必修 2単位

西岡 淳

1. 授業の概要(ねらい)

「国際協力」という言葉は、様々な場面で用いられているが、独立の用語としては、日本では「開発途上国に対する経済協力」を意味することが多い。この授業では、主に「国際開発援助」即ち「開発途上国に対する先進国や国際機関による開発のための援助」としての国際協力を学ぶ。第2次世界大戦後独立した国の多くは開発途上国に分類されるが、この「開発途上国」という区分は何を基準としているのか、「開発途上である」とはどのような状態のことか、また先進国や国際機関は開発途上国がそうした「開発途上の状態」から脱するために「開発援助」を通じてどのような取り組みを行ってきたのか、そして現状はどうか、さらに開発途上国の開発問題が世界全体にどのような影響を及ぼしているのかなどのテーマに基づき、開発途上国と開発問題を概念的かつ具体的に理解できるように授業を進めていく。

授業では、「国際開発援助」の枠組みとODAについて理解し、開発経済学の動向にも触れつつ「国際開発援助」の歴史の変遷について概観する。さらに、外務省及び海外経済協力基金(現在のJICA)において実際の開発援助に携わった私自身の経験を基に、日本のODAについて概説する。最後にアジアとアフリカの開発問題の状況についても俯瞰的に見ていく。また、外部の専門家を招いて開発援助の現場での経験を語ってもらう機会も予定している(万が一、新型コロナウイルスの影響で実現できない場合は、通常の授業を行う。その場合の授業のテーマについては事前に通知する)。第1回及び第3回(予定)の授業はオンライン(オンデマンド形式)で行う。

今日の国際社会が直面する様々な問題の多くが開発途上国と開発問題に関連付けられると言っても過言ではない。国際開発援助に関する知識を身に付けることは、現代の国際政治経済問題の背景を理解し、世の中に流布している開発問題に関する種々の情報を客観的に評価できることにつながるであろう。

2. 授業の到達目標

開発途上国についてその定義やどのような課題を抱えているかについて説明できる。
国際開発援助、ODAについて説明できる。

3. 成績評価の方法および基準

平常点(出席及びリアクションペーパーの提出、LMSによる復習テスト/課題):60%
期末テスト:40%

4. 教科書・参考文献

教科書

特に使用しない。授業では、スライドを用いる。

参考文献

下村恭民、辻一人、稲田十三、深川由起子 『国際協力 その新しい潮流(第3版)』 有斐閣(2016)
ジェトロアジア経済研究所、黒岩郁夫、高橋和志、山形辰史 『テキストブック 開発経済学 (第3版)』 有斐閣(2015)
黒崎卓、大塚啓二郎 『これからの日本の経済協力 ビッグドナーからスマートドナーへ』 日本評論社(2015)

5. 準備学修の内容

毎回の授業後にLMSによる復習テストまたは課題を課すので、自宅学修を行うこと。

6. その他履修上の注意事項

遅刻は減点対象とする(但し、30分以上の遅刻は出席とはカウントしないので注意すること)。

7. 授業内容

- 【第1回】 (オンライン授業)ガイダンス(授業の目的、授業の進め方、成績判定についての説明)
開発途上国とは
- 【第2回】 開発途上国に対する資金の流れと政府開発援助(ODA)
- 【第3回】 (オンライン授業を予定)国際開発援助の枠組み
- 【第4回】 国際開発援助の沿革(その1)
- 【第5回】 国際開発援助の沿革(その2)
- 【第6回】 開発と環境
- 【第7回】 SDGs
- 【第8回】 貧困問題
- 【第9回】 日本のODA(その1)
- 【第10回】 日本のODA(その2)
- 【第11回】 開発援助の現場から(外部専門家による講演1)
- 【第12回】 アジアの開発問題
- 【第13回】 アフリカの開発問題
- 【第14回】 開発援助の現場から(外部専門家による講演2)
- 【第15回】 新興国による途上国援助

なお、以上は予定であり、変更することがあり得る。